

# 貝塚御坊願泉寺本堂の二十四孝彫刻

二十四孝は、中国古来の有名な親孝行であった人びとの総称です。日本では、漢文で書かれた『全相二十四孝詩選』をもとに、それぞれの説話をまとめたものが『御伽草子（おとぎそうし）』として江戸時代に刊行されました。貝塚御坊願泉寺の本堂内には、内陣・外陣の境と矢来（やらい）の北面・南面の天井を支える臺股（かえるまた）、矢来の虹梁（こうりょう）上の挟間（はざま）部分に、24 話分の彫刻が揃っています（8頁平面図参照）。今回は、それらの彫刻の写真と説話のあらすじを簡単に紹介します。

## ①大舜（たいしゅん）

大舜は大変孝行な人でした。彼の父親はとてもへんくつな人で、母親は心のねじれた人で、また弟はともなまけ者でした。しかし、彼はひたすら家族に孝行を続けました。彫刻は、ある時歴山（れきざん）というところで田を耕していたところ、彼の孝行を感じて大きな象が来て田を耕し、また鳥が飛んできて雑草を取り除き、耕作の手助けをした、という場面です。当時の王であった堯（ぎょう）は、その孝行な心を聞きおよび、娘を后として大舜に天下を譲りました。これはひとえに孝行の深い心より起こったことだといえます。



## ②漢文帝（かんのぶんてい）

漢の文帝は、初代皇帝である高祖劉邦（こうそりゅうほう）の皇子です。幼名を恒（こう）といい、とりわけ母親の薄太后（はくたいこう）に孝行でした。彫刻は、まず自ら毒味をしたうえで、いつも母に食事を運んでいた、という場面です。恒には兄弟もたくさんいましたが、彼ほど仁義に厚く孝行な皇子はなく、そのため臣下の者たちは彼を皇帝として推薦しました。皇帝となった彼は漢の文帝を名のり、孝行の道を知る彼の治世は、豊かで民衆も住みやすい時代になったといえます。



## ③丁蘭（ていらん）

丁蘭は、河内（かだい）の野王（やおう）というところに住んでいた人でした。15歳の時に母親を亡くし、永くその死を悲しんだことから、母の姿をした木像を作りました。ある晩、妻が火でその木像の顔をこがしたところ、できもののようにはれ上がり、うみと血が流れました。その二日後、妻の髪が刀で切ったように抜け落ちました。妻は驚いてわび言を言うので、丁蘭も不思議に思い、木像を大きな道沿いに移し置いて、妻に三年間わび言をさせました。すると、一夜のうちに雨風の音がして、木像は自ら家の中に戻ってきました。それ以後は、少しのことでも木像のようすをうかがうようになったといえます。彫刻は、丁蘭夫婦が母の木像に食事を運んでいる場面です。





#### ④老萊子（ろうらいし）

老萊子は、両親によく仕えた人でした。彫刻は、70歳になった老萊子が、年老いた両親の前で、派手な着物を着て、子どものような格好になって踊っている場面です。また、彼は両親に食事を出す時には、わざと、けつまずいて転んで、子どものように泣いたりしました。彼がこのようなことをしたわけは、年老いた自分の姿を見て両親が悲しく思うことを恐れ、また両親自身が年老いたと思わせないように、このような振る舞いをしたといひます。



#### ⑤唐夫人（とうのふじん）

唐夫人は、姑に孝行な人でした。彫刻は、歯がなく食べ物をかむことができない姑の長孫夫人（ちょうそんふじん）に、自分の乳を飲ませている場面です。このほか、毎朝髪をとくなど、さまざまなことで姑によく仕えました。ある時、長孫夫人が病気をわずらった時には、一族を集めた前で「唐夫人の数年の恩に報いることもできず、今死のうとしていることは心残りだ。わが子孫が、夫人の孝行をまねるならば、必ず将来繁栄するでしょう」と言わせるほどであったといひます。



#### ⑥郭巨（かくきょ）

郭巨は、河内というところに住んでいた人です。貧しいながら夫婦で母親を養っていました。妻が一子を生むと、母親は孫をかわいがり、自分の少ない食事を分け与えるほどでした。ある時、妻に「自分たちの子どもがいては母の食事が足りない。お前と夫婦でいれば子どもはまた授かるが、母は二度と授からない。とにかくこの子を埋めて母を養おう」と言うと、妻はさすがに悲嘆に暮れましたが、夫の命に従い、子どもを埋めに行きました。彫刻は、涙をおさえながら地面を少し掘ったところ、「天、孝子郭巨に賜う…」と書かれた黄金の釜を掘り出した、という場面です。その釜を得て大いに喜び、子どもとともに持ち帰り、母にますます孝行を尽くしたといひます。





⑦田眞（でんしん）、田廣（でんこう）、田慶（でんけい）

この三人は兄弟です。両親が亡くなったあと、親の財産を三等分しましたが、庭先に紫荊樹（しけいじゅ）という枝葉が生い茂り、花も咲き乱れる一本の木がありました。彫刻は、この木をも三等分しようと夜通し三人で話し合っている場面です。木を切ろうと根元に行くと、昨日まで栄えていた木が急に枯れたのを見て、田眞は「草木にも心があって、三等分に切ろうというのを聞いて枯れたのだ。人として、この木の心をわきまえなければならない」と言って、結局切らずにおくと、木はまた元通りに見事に茂ったといひます。



⑧庾黔婁（ゆきんろう）

庾黔婁は、南齊時代（472～502年）の人で、孱陵県（せんりょうけん）という土地の役人になりました。着任して十日も経たないうちに胸騒ぎがしてならないため、父親が病気かと思い、職を捨てて家に帰ったところ、思った通り大病をわずらっていました。医師に病状を尋ねると、「病人の便をなめて、甘いかわかればよかろう」と言うので、簡単なことだと言ってなめてみると、苦かったのが、その死が近いことを悟りました。彫刻は、北斗七星（あるいは北極星）に父の身代わりになることを祈り続けた、という場面です。



⑨王祥（おうしょう）

王祥は幼い時に母を亡くしました。父はまた妻をめとり、その継母は父子の仲を悪くしようとして、父に子を憎ませましたが、それを恨みにも思わず、継母にもよく孝行するほどの人物でした。ある冬の厳寒のおり、継母が生魚を食べたいと言うので、肇府（じょうふ）というところの河へ行きましたが、氷がはって魚は見えませんでした。彫刻は、衣服を脱いで裸になり、氷の上に横たわって魚がいない事を悲しんでいたところ、氷が少しとけて、魚が二匹おどり出てきた、という場面です。早速これを獲って帰り、母親に与えました。この孝行のためか、彼が横たわったところには、毎年人が横たわったような形が出たといひます。





#### ⑩呉猛（ごもう）

呉猛は、8歳にして孝行の心がある人でした。家は貧しく、何事もうまくいかない生活を送っていました。そのため、夏になっても蚊帳（かや）もないほどでした。そこで呉猛は、「自分の着物をぬいで親に着せ、みずからは裸になって蚊に刺されたならば、蚊も自分だけを刺すようになり、親は助かるだろう」と思いました。彫刻は、毎晩裸になって、自分を蚊に刺させて、親の方へ蚊がいかないようにしていた、という場面です。



#### ⑪黄香（おうきょう）

黄香は安陵（あんりょう）というところに住んでいた人でした。9歳の時に母親を亡くし、残された父親によく仕えました。彫刻は、夏のとても暑い時に、父親の枕や座（今でいうベッド）を扇子であおいで涼しくしている場面です。また、冬のとても寒い時には、父の衾（ふすま、＝布団）が冷たいことを悲しんで、自分の体でそれを温めました。その土地の太守（たいしゅ）は、このように孝行であると高札を立てて彼の孝行をほめたところ、人はみな黄香こそ孝行第一の人であると知ったといひます。



#### ⑫張孝（ちょうこう）、張礼（ちょうれい）／孟宗（もうそう）



【張孝、張礼】張孝と張礼は兄弟で、飢饉の時に80歳を過ぎた母親を養っていました。弟の張礼が木の実を拾いに行ったところ、盗賊がやって来て、お前を殺して食べてやると言いました。張礼は「私には年老いた母がいます。今日はまだ食事をしていないので、少しだけ時間を下さい。母に食事をさせればすぐに戻って来ます。もしこの約束を破れば、家に来て一族までも殺してください」と言って家に帰りました。母親に食事をとらせて、約束通り盗賊のところに戻りました。彫刻は、これを聞いた兄の張孝が、あとから盗賊のところへ行き、「私は張礼より太っているので、食べるにはいいだろう。私を殺して、弟を助けてくれ」と言っている場面です。また張礼は「私が食べられるのが最初の約束です」と言って、死を争ったので、盗賊は兄弟の孝行の心を感じて二人の命を助けて、このような兄弟は滅多にいないと米と塩までも与えました。兄弟はそれらを持ち帰り、ますます孝行を尽くしたといひます。

【孟宗】 孟宗は、幼い時に父親を亡くし、一人の母親を養っていました。年老いて病気がちな母親は、食事のたびに不都合なものを欲しがり、ある冬にはタケノコを食べたいと言いました。そして孟宗は竹林に行きタケノコを探しましたが、雪も深く、手に入るはずがありませんでした。天にあわれみを乞い、祈りながら大いに悲しみ、竹に寄りかかっていたところ、にわかに大地がひらけて、タケノコが生え出てきました。彫刻は、出てきたタケノコを掘っている場面です。大変喜んでタケノコを取って帰り、汁物を作り母親に与えると、これを食べた母はそのまま病氣も治り、長生きをしたといひます。

⑬陸績（りくせき）／曾参（そうしん）



【陸績】 陸績は、6歳の時に袁術（えんじゅつ）という人のところへ行きました。袁術は、陸績のために果物としてみかんを出しました。彼はこれを3つ取って、袖に入れて帰ろうとしました。彫刻は、おじぎしようとして袖よりみかんを落としてしまい、これを見た袁術が「陸績殿は幼い人に似あわないことをする」と言った、という場面です。これに対して、「あまりに見事なので、家に持ち帰り母に食べさせたかったのです」と言いました。袁術はこれを聞いて、幼いのにこのような心遣いは近ごろ聞いたことがないとほめたたえたといひます。

【曾参】 曾参はある時、山中へ薪を取りに行きました。家では母親が留守番をしていましたが、そこへ親友が訪ねて来ました。母は親友をもてなしたいと思いましたが、息子は家におらず、もともと家が貧しいのでもてなすこともできず、「曾参よ、帰って来ておくれ」とみずからの指を噛みました。彫刻は、曾参が山で薪を拾っていましたが、急に胸騒ぎをしたので、急いで家に帰ったところ、母がありのままをくわしく話している場面です。このように指を噛んだことが遠くにまで伝わるのは、親子の情けが深い証であるといひます。

⑭姜詩（きやうし）



姜詩は、母親に孝行な人でした。母はいつも揚子江の水を飲み、また生魚のなます（細く切った肉）を食べたいと思っていました。そのため、妻に遠く離れた大河の水を汲ませて、また魚のなますを調理させて与え、いつも夫婦ともによく仕えました。彫刻は、ある時、姜詩の家のそばに急に大河のような水が湧き出て、その水中に鯉があらわれた、という場面です。それ以後は、毎朝あらわれる鯉をとって母に与えるようになりました。このような不思議なことは、夫婦の孝行を感じた天が与えたものだといひます。



⑮朱寿昌（しゅじゅしょう）



朱寿昌は、7歳の時に、父親と母親が別れました。そのため、母のことをよく覚えておらず、このことを嘆いていましたが、ついに会わないまま50年が過ぎました。ある時、役人であるにもかかわらず、官位や俸禄、妻子までも捨てて、秦というところへ尋ねていきました。彫刻は、「母に会わせてまえ」と言って、みずから血を流してお経を書き、天へ祈りをかけて尋ねたところ、その志の深さから、ついに母に会うことができた、という場面です。

⑯関子騫（びんしけん）



関子騫は、幼い時に母親をなくしました。父親はまた妻をめとって、2人の子ができました。義母はわが子を深く愛して、義理の息子を憎み、寒い冬でも蘆（あし）の穂を入れた薄い着物を着せるので、身体も冷えて耐えかねているのを見た父は後妻と離縁しようとしてしました。彫刻は、関子騫が「お母さんが去ってしまえば、私たち3人は寒い思いをするでしょう。今、私一人がこらえれば、弟2人は暖かく過ごせるでしょう」と言って、父をいさめた、という場面です。この言葉に心を動かされ、義母もそれ以後は分け隔てなく愛するようになり、もとの母と同じようになったといいます。

⑰董永（とうえい）



董永は、幼い時に母親と離れ、家は貧しく、いつも人に雇われて、農作をして賃金をもらい日々を暮らしていました。父親は足が悪かったため、董永は小さな車を作って父を乗せ、田んぼの畔に置いて養っていました。ある時父が亡くなり、葬式を用意したいと思いましたが、貧しいので叶いませんでした。そのため、銭で自分の身体を売り、葬式を営みました。そして、銭主のもとへ行こうとしたところ、道中で一人の美女に出逢いました。その女性は「あなたの妻になります」と言って同行し、



ひと月に上質の絹を織って返したので、銭主もこの女性の心を感じて董永を許しました。彫刻は、その後、妻が董永に向かって「私は天上の織姫ですが、天があなたの孝行な心を感じて、私を地上に下ろして借金を返済させたのです」と言って、天上へ帰っていった、という場面です。

#### ⑱ 剡子（ぜんし）



剡子は、親のために命をすてようとするほどの孝行な人でした。両親は年老いて、二人とも両眼をわずらっていたところ、眼の薬になると聞いて、鹿の乳を手に入れてほしいと願いました。両親の願いをかなえたいと思い、鹿の皮をかぶって、群れをなしている鹿たちの中へ入りこみました。彫刻は、**猟師たちがこれを見て、本物の鹿だと思い、弓で射ようとした、という場面です。**その時剡子は「私は本物の鹿ではありません。剡子という者ですが、両親の願いをかなえたく思い、鹿の格好をしているのです」と声を上げて言うので、猟師たちは驚いてその訳を尋ねたところ、ありのままを話しました。そして孝行の心が深いゆえに、矢を逃れて帰ることができたといひます。

#### ⑲ 楊香（ようこう）／山谷（さんこく）



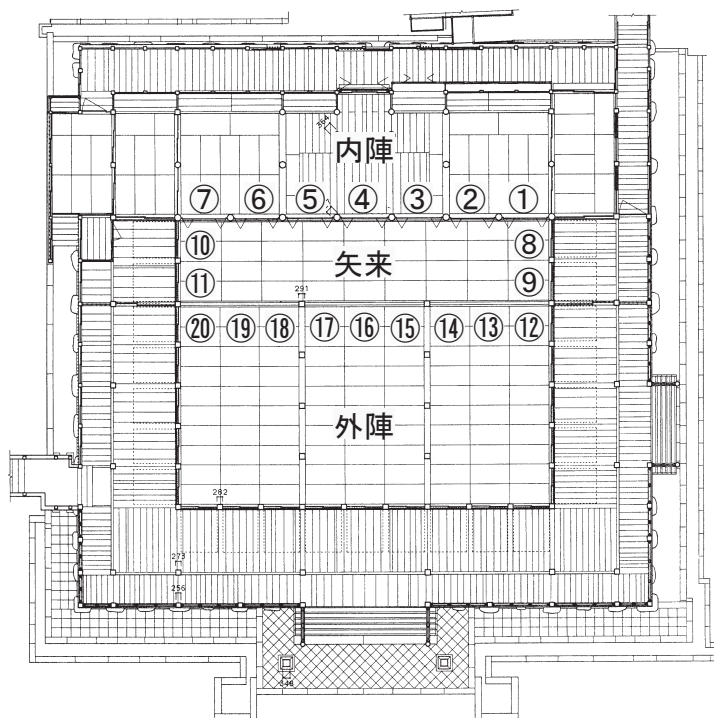
**【楊香】** 楊香には一人の父親がいました。ある時、父とともに山へ行ったところ、急に凶暴な虎に遭いました。彫刻は、**楊香が父の命を失うことをおそれて、虎を追い払おうとしている場面です。**結局、虎を追い払うことができなかったので、天に向かって「どうぞお願いですから、私の命を虎に与え、父を助けてください」と志を深くして祈ったところ、それまで凶暴で二人を食べようとしていた虎が、急に尻尾をすばめて逃げていってしまったので、父子ともに虎口の難をのがれて無事に家に帰ることができました。

**【山谷】** 山谷は、宋の時代の詩人で、現在でも詩人の祖師といわれる人です。彼の家には使用人も多く、また妻もいましたが、母親の世話は山谷がしていました。彫刻は、**便器にたまった母の小便を流している場面です。**このように便器が汚れていると、自分の手でこれを洗って返すなど、毎日朝から晩まで母によく仕え、怠ることがありませんでした。一事をもって万事を知る、その他の孝行は推して知るべし、としてその孝行は世間に広く知られることとなり、二十四孝のなかでも特に有名な人であったといひます。



【王裒】王裒は棠陰というところに住んでいた人でした。父親は、思いがけないことで皇帝により処刑されました。彼は父の死を恨んで、一生皇帝のいる方角には向かないで座りました。また父の墓所では、ひざまずき礼拝して、植えてある柏の木に取りついて泣き悲しんだため、涙がかかって木が枯れてしまうほどでした。また、母親はいつも雷を怖れる人でした。彫刻は、母の死後も雷が鳴ると急いで墓所へ行き、「自分はここにいます」と、亡くなった母に力添えしていた、という場面です。このように両親が亡くなったあとまで孝行をするのだから、彼の生前の孝行は計り知れないであろうということです。

【蔡順】蔡順は汝南（じょなん）というところに住んでいた人でした。新の王莽（おうもう）という人の時代の終わりに天下は大いに乱れ、また飢饉がおこりました。食べ物が乏しかったので、母のために桑の実を拾いに行きましたが、熟したものとまだ熟していないものを分けていたところ、盗賊たちがやって来ました。彫刻は、盗賊たちが「なぜ桑の実を黒と赤に拾い分けているのか」と尋ねたところ、「一人の母がいますが、この熟したものは母に与え、まだ熟していないものは自分が食べようと思っているのです」と答えた、という場面です。盗賊たちは彼の孝行を感じて、米と牛の足を与えて立ち去りました。孝行のしるしか、その米と牛の足はしばらく無くなることはなかったということです。



本堂平面図

- |           |           |
|-----------|-----------|
| ①大舜       | ⑪黄香       |
| ②漢文帝      | ⑫張孝、張礼／孟宗 |
| ③丁蘭       | ⑬陸績／曾参    |
| ④老萊子      | ⑭姜詩       |
| ⑤唐夫人      | ⑮朱寿昌      |
| ⑥郭巨       | ⑯閔子騫      |
| ⑦田眞、田廣、田慶 | ⑰董永       |
| ⑧庾黔婁      | ⑱劓子       |
| ⑨王祥       | ⑲楊香／山谷    |
| ⑩呉猛       | ⑳王裒／蔡順    |

かいづか文化財だよりテンプス別冊 4 号

貝塚市教育委員会発行

〒 597-8585 貝塚市畠中 1 丁目 17-1

Tel (072) 433-7126 Fax (072) 433-7107

Email: shakaikyoiku@city.kaizuka.lg.jp

(1,000 部作成、印刷単価 41.58 円)

撮影：公益財団法人文化財建造物保存技術協会

※二十四孝の各説話については、日本古典文学大系 38『御伽草子』（市古貞次校注、1958 年）掲載の「二十四孝」の内容をもとにしています。